

☆キラリ☆ 教育活動に創意工夫を！

創意工夫のある取組や効果的な取組をしていらっしゃる学校を紹介するコーナーです。今回は、特別支援教育について武雄市立西川登小学校の取組を紹介します。

**西川登小学校**  
 ～特別支援教育～

西川登小学校は、特別支援学級における授業の充実はもとより、**全職員が特別支援教育を理解したり考え方やスキルを身に付けて実践しようとしていたり**していらっしゃいます。

**1 西川登小学校の取組**

(1) 校内研究に位置づけ

校内研究の組織(図1)において、特別支援教育の視点を重視するために、授業部会の中に特別支援学級部会を位置づけている。

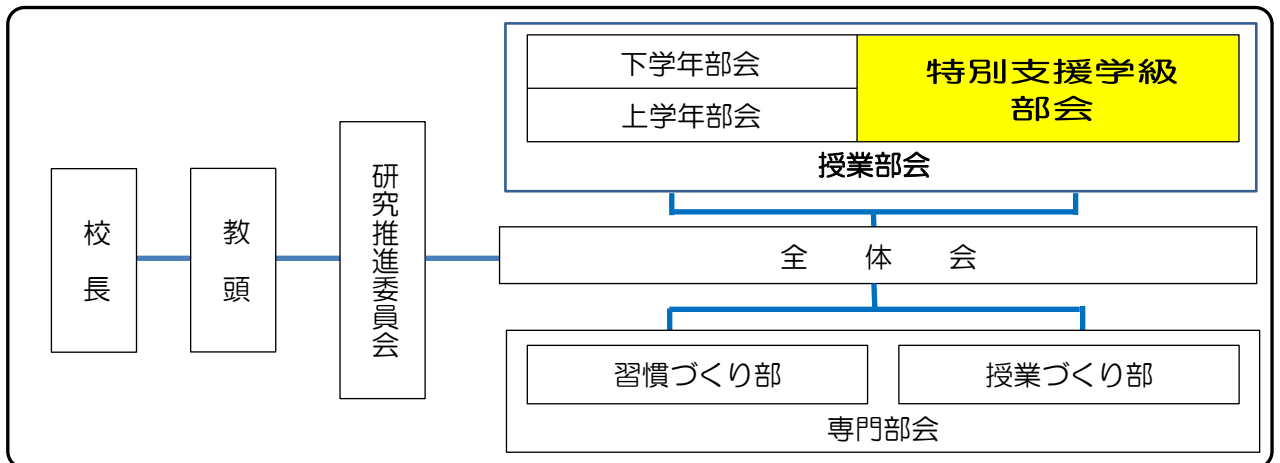


図1 校内研究の組織図

(2) 全体授業研究会

下学年部会と上学年部会と同様に、特別支援学級部会も全体研を行う。

研究授業(図2)を全員で参観。授業研究会では、研究主題「自分の考えをもち、豊かに学び合う児童の育成～子どもの思考を可視化させる指導の工夫～」のもと、手立ての有効性や最適化について話し合った。

本学級の児童は1名であるため学び合うことはできないが、画像や言葉で活動の手順を示した掲示物(図3)や振り返り(図4)など、随所に視覚的な手立てがあり、児童の主体的な学びにつながっていた。



図2 特別支援学級の研究授業



図4 振り返りの工夫(可視化)

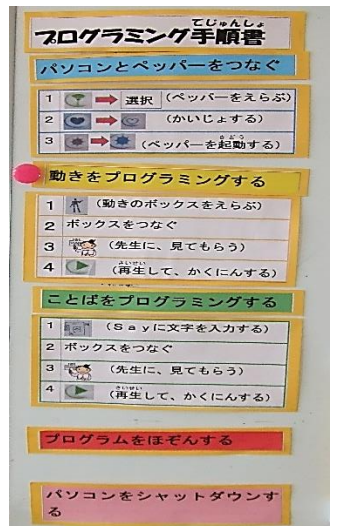


図3 活動手順の掲示物(可視化)

### (3) 教育相談連絡会

学級で抱える課題の解決策や、問題が起こる前の予防的な手立てについて話し合う場として、週に一回、校内で教育相談連絡会が開かれる。

学級における悩みを気軽に相談することができる。特別支援教育の視点から、また、先生方の経験等から、児童への関わり方や指導方法を考えることができる。また、個に応じた支援が必要な場合は、留意事項を全職員で確認したり校内の協力体制を作ったりしている。

## 2 先生方の声

### ○ 特別支援学級の授業を参観して

- ・ 実際に学習の様子を見たことで、**児童の性格や授業以外で会った時の適切な関わり方など**を知ることができた。
- ・ 特別支援学級の児童が手の動きや言葉をプログラミングしたペッパー(図5)が、登校してきた児童を玄関で迎えている(図6)。**全校児童が特別支援学級の児童を認めることにつながっている。**
- ・ 授業作りや指導法について多くのことを学ぶことができた。特に、**活動や約束を絵で表した視覚的な手立てや、タブレットを使っての活動は、児童の主体性の向上**に結び付いていた。特別支援学級を担任する時に生かすことができる。



図5 ペッパーをプログラミングしている様子



図6 ペッパーが児童をお出迎え

### ○ 他の教育活動への広がりについて

- ・ 特別支援学級の授業を参観して、児童と先生のやりとりや児童の表情から**信頼の厚さ**を感じた。自分の学級でも、先生と児童や児童同士の信頼関係を作っていきたい。
- ・ **見て理解できる視覚的な手立てはとても有効**である。自分の授業でも使っていきたい。
- ・ 教育相談連絡会で話題にすることで、**通常学級の配慮が必要な児童の性格や行動、対応の仕方**を全職員が共通理解することができ、**共通実践につなげることが**できる。学級の課題は担任だけで解決できることばかりではないため、いろいろな先生の考えや協力を得ることができるのでありがたい。

## チョムラナムド

### 全羅南道教職員交流視察研修

平成29年10月11日(水)~14日(土)

佐賀県教職員のための海外派遣研修の一つに、佐賀県と友好交流協定を結ぶ韓国の全羅南道への視察研修があります。研修の中で、小学校の理科と中学校の英語の授業を参観しました。

#### 小学校4年 理科「植物の分類」



- ・ タブレット端末を使い、SNS上にアップ。児童の操作スキルが高い。
- ・ 葉のにおいや手触り、厚さ等は実物を観察。ICT機器は有効な時にものみ使用。

#### 中学校1年 英語 「What do you want to do?」



- ・ 日本の同学年より語彙が豊富。1997年、小学校において英語が教科に(小学校3年から)なったことが背景にある。
- ・ 座席は4人グループ。話すことを重視し、グループで話し合ったり、グループや学級全体で問題を出し合ったりしていた。

ICTと外国語教育において、韓国はとても進んでいました。その反面、全羅南道の先生方から「ネット上でのいじめ」や「小学校段階での英語の学習に対してのやる気の低下」といった課題を聞きました。これらは、日本でも耳にすることです。情報モラルに関する指導や外国語教育は、小学校と中学校で分けて考えず、双方の充実と円滑な接続が大切であることを改めて感じました。

